

日本と韓国の就職事情と大学生の就職観の違いについて

－日本の沖縄の大学生と韓国の大邱の大学生を対象にした実態調査－

平田梨莉、Riri Hirata

日本と韓国の就職観の違いについて考察を行った。先行研究では、日本の学生の就職観は「楽しく働ける」を重視していることが分かり、韓国の学生の就職観は「給与」を重視していることが分かった。そこで本論では、この就職観の違いについて、日本と韓国の就職競争の激しさの違いや起業のハードルの高さの違いが影響しているのではないかと考え、これらについて検証した。日本と韓国の大学生 120 名にアンケート調査を行い、その結果、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも、自国の就職状況について厳しいと思っている傾向がある。起業のハードルについては、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも、知識、資金面に関して十分あると思っていることがわかったが、起業に対する不安感に関しては日本の大学生の方が韓国の大学生よりも高い傾向にある。就職観については、日韓の大学生の間で違いが見られず、起業志望度については、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも高い傾向にあることがわかった。

キーワード：就職、就職観、日韓比較

はじめに

2021 年 8 月～2022 年 3 月まで韓国に留学していた際、町の至るところにカフェが乱立している光景を目の当たりにした。韓国農水産食品流通公社の食品産業統計情報システムが公開したデータ¹によると、2021 年度のコーヒー専門店事業体数は 96,437 店舗に上り、これは全日本コーヒー協会が発表している 2021 年度の喫茶店 58,669 事業所数²店舗を大きく上回っている。2021 年時点で韓国の人口は 51,692,000 人、日本の人口は 124,946,789 人であり、人口は日本の方が倍でありながらもカフェの事業所数は韓国の方が倍近く上回っていることがデータとしても明らかになっている。また、world bank が 2021 年に調査した世界の自営業の総雇用に着める割合³によると、日本の自営業の総雇用に着める割合は 9.83%、韓国の自営業の総雇用に着める割合は 23.88%であり、韓国は自営業者の総雇用に着める割合で高い水準を記録している。

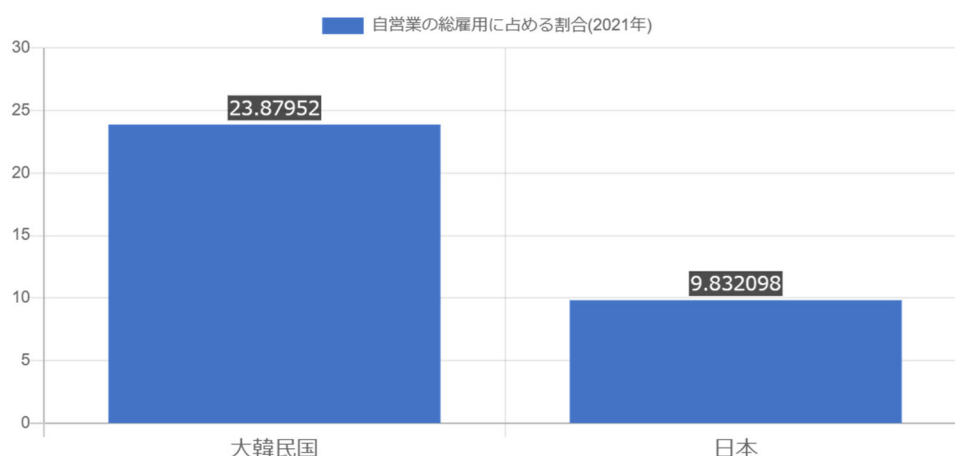


図 1 「韓国・日本の自営業の総雇用に占める割合比較表」 出典：GraphToChart

韓国ではフランチャイズのカフェだけでなく個人経営のカフェが多い理由も、この自営業者の高い割合から考えることができる。この事実から、もしかすると韓国は日本よりも自営業や起業することに対するハードルが低く、そして日本と韓国の大学生の就職に対する意識に違いが関係しているのではないかと考えた。なぜ韓国では個人経営のカフェが多いのか、これは本論の問いである。この問いについて、仮説は、韓国で個人営業のカフェが多いのは若者の就職観に影響された結果ではないかということである。質問票調査を通じて、この仮説を検証しその原因を明らかにするのが本稿の目的である。

日本と韓国の就職事情

日韓における就職意識の違いを分析するために、まず両国の就職事情に着目してみる。中畠（2019）は、日本と韓国について、単線型学校制度（6-3-3-4 制）、学歴社会、晩婚化、性別役割分業意識等、共通点は少なくない⁴と述べており、日韓の若者を取り巻く環境には共通点が多いことが分かる。日本の最新の大卒者の就職状況を見てみると、厚生労働省と文部科学省が共同で調査し、公表している令和 4 年 3 月大学等卒業者の就職状況⁵（4 月 1 日現在）では、大学生の就職率は 95.8%となっており、ほぼ 100%に近い学生がどこかの企業に就職していることが分かる。韓国の最新の大卒者の就職状況を見てみると、韓国の教育部が公表している 2022 年度の大学卒業生の就職率は 69.6%⁶であり、2018 年以降の過去 5 年間の就職率で最高数値を記録しているものの、未だ大卒者の就職率は低い状況にある。しかし、グローバルノートー国際統計サイトによる世界の大学進学率国別ランキング（短期大学含む）2022 年の最新データでは、韓国の大学進学率は世界 9 位の 100.32%を記録している。⁷このランキングで日本は 53 位の 62.14%のため、いかに韓国が大学に進学することが当たり前の社会であるかがよく分かる。しかし、高校を卒業後ほとんどの学生が大学に進学するにも関わらず、大卒者の就職率が低いので、韓国の就職状況の厳しさがよく分かる。そのほ

かに、学生の就職活動のスケジュールとしては、日本の大学生は早い人で大学 3 年生から就職活動をはじめますが、韓国の大学生の多くは、就職活動を 4 年生の 2 学期からはじめるという違いがある。就職活動を 4 年生の 2 学期から行うことに対して、日本の大学生から見ると遅いのではないかという意見もあるかもしれないが、韓国の大学生は 1 年生の頃から志望する有名企業に入社するために、就職に有利な資格の取得や、長期インターン、語学学習、海外留学など、自らの SPEC を高めるために多くの時間を使う。しかし、それでもさらに就職準備に時間を費やす場合も多く、韓国の教育部が公表している「2022 년 고등교육기관 졸업자 취업통계조사」⁸によると、就職準備期間は、卒業前(入学前を含む)が 34.7%、卒業後 3ヶ月未満が 25.3%、3~6ヶ月未満が 15.5%、6~9ヶ月未満が 14.9%、卒業後 9ヶ月以上が 9.7%となっており、卒業後も就職準備に時間を費やしている学生が半数を超えている。

| 취업준비기간별 취업 상황 |

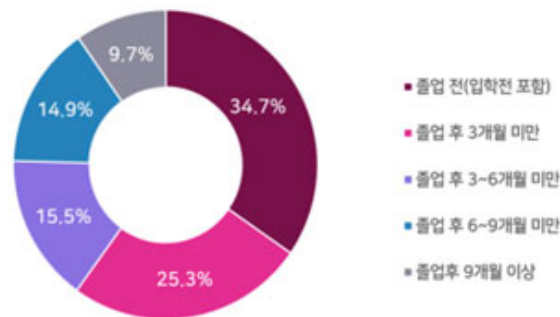


図 2 「就職準備期間別 就職状況」 出典：대한민국 교육부

また、日本では GPA という大学の成績換算点数を重視する企業は少なく、GPA よりも SPI のような適性検査で就活生の能力や性格を診断するといったケースが多いが、韓国では学業成績も就職活動において重要な選考基準となるため、良い成績をとるために日頃から勉学に力を入れているといった違いもある。

先行研究

日本の大学生の就職観について、まず始めに、株式会社マイナビが学生の就職意識や就職活動全体の動向を把握することを目的に、1979 年卒から毎年実施している「マイナビ 職業意識調査⁹」の最新データである 2024 年卒のアンケートデータ 8 項目から本論文に関係のある 5 項目に着目してみていく。(1) あなたの就職観に最も近いものはどれですか? という質問に対しては、「楽しく働きたい」という回答が最多であった。次に、(2) あなたは

「大手企業志向」ですか、それとも「中堅・中小企業志向」ですか？という質問に対しては、大手企業志向が 48.9%となっており、会社のネームバリューを重視する学生は半数近く存在することが分かる。次に、(3) 企業選択をする場合、どのような企業がよいと思いますか？という質問に対しては、「安定している」が 5 年連続で最多の 48.8%を占めた。「自分のやりたい仕事（職種）ができる」が 30.5%、「給料の良い」が 21.4%と続いており、19 年卒からはこれらの項目がトップ 3 になっている。次に、(5) あなたの就職希望度は次のうちどれですか？という質問に対しては、「なにがなんでも就職したい」が 86.4%、「希望する就職先に決まらなければ、就職しなくともよい」が 13.6%であった。この設問で「希望する就職先に決まらなければ、就職しなくともよい」と回答した人のみに行った (6) 就職しなかった時の進路はどうしますかという質問に対しては、「進学（留学、大学院進学）」が 26.7%、「卒業して次年度就職活動する」が 21.8%、「フリーター」が 30.8%、就職留年が 13.8%、起業が 6.9%であり、就職しない場合に起業を選択する学生は 10%未満という結果になっている。

大脇・脇田・小見山・伊藤・新井・大久保（2008）が実施した「大学生を対象にした就職意識調査¹⁰」の「II 就職先や仕事を最終的に決定する基準」では、回答者に就職先や仕事を最終的に決定する基準となる 43 項目を提示して、各項目に対して 4 段階評価で回答を求めた。重要度 90%以上の 5 項目からは、「社員を重視し、楽しい職場環境であり、仕事に対する正しい評価をしてくれる企業」、重要度 80%以上の 7 項目からは、給与面や勤務時間に関心が移り、「自己の意志で、仕事の判断とか休暇や勤務時間のとり方などが決定できる環境の企業」を学生が求めているという結果が現れている。この調査でも、学生が就職先や仕事を最終的に決定する基準にはまず「楽しい」というワードが出てきており、日本の学生は会社選択の際に「自分が楽しく働けるか」を重視する傾向があると考えられる。

また、植田・小平（2020）が行った現代学生勤労意識調査アンケートの結果¹¹によれば、「大学卒業後に就職しようと考えているか」という質問に対して、「大学を卒業後、就職をする」と答えた学生は、102 名の学生中、99 名（97.1%）であった。就職しないと答えた学生は 3 名（2.9%）である。就職しない学生の中には大学院への進学を考えている学生もいるが、ほぼ全員が就職を考えていることが分かる。「就社か、就職か」という質問には、「会社に就社する（良い会社を選ぶ）」が 49.5%、「職種に就職する（やりたい仕事を選ぶ）」が 44.4%、その他が 6.0%という結果が出ている。「会社に就社する（良い会社を選ぶ）」が、「職種に就職する（やりたい仕事を選ぶ）」を若干上回っていることから、就職活動において会社のネームバリューは、少なからず影響を与えていることが考えられる。将来のキャリアについては、「定年まで一つの会社に就業」が 27.3%、「転職してキャリアアップを図る」が 40.4%、「独立して起業する」が 6.1%、「その他（未定）」が 26.2%となっている。「定年まで一つの会社に就業」「転職してキャリアアップを図る」の二項目を合わせると 67.7%となり、起業よりも会社の下で働くという意識が強いのではないかということが読み取れる。

韓国の大学生の就職観については、한국대학신문が毎年10月15日の創刊記念日を記念して、全国的に行っている「大学生意識調査¹²⁾」の最新データである2023年度のデータから本論文に関係のある項目をみとめる。大学生が仕事を選ぶときの条件という質問項目では、「給与」が32.2%で最多だった。次いで「職場の雰囲気」(17.2%)、「適性・能力」(15.5%)、「安定性」(14.6%)と続いた。仕事を探すときに好ましいグループという質問項目では、Samsung・LGなどの大企業(35.5%)が1位にランクインし、2位は韓国電力(KEPCO)や空港公社(18.8%)など公企業、3位はネイバー(Naver)やカカオ(15.8%)などのIT企業、4位は技術力と将来性のある中小企業(14.0%)と続いた。3位までにランクインしている会社は全てネームバリューがあり、安定している会社であるため、70%を超える大学生が大手企業志向ではないかと読み取ることができる。

また、統計数理研究所が2004年から2009年の間に日本や韓国を含む10ヶ国を対象にして行った「環太平洋価値観国際比較調査¹³⁾」から労働や職業意識に関する項目を取り上げ、芝居・吉野がデータ化した結果によると、回答パターンから、韓国は「給料を重視」を選んだ人が多く、日本は「職場の人間関係と達成感を重視」を選んだ人が多かった。ここでも日本と韓国の仕事に対する意識の違いが表れている。

以上のことから、日本の学生の職業観に関しては「楽しく働ける」を重要視していることが分かり、韓国の学生の就職観に関しては「給与」を重要視していることが分かった。

仮説

先行研究では、日本の学生の職業観は「楽しく働ける」を重視していることが分かり、韓国の学生の職業観は「給与」を重視していることが分かった。この就職観の違いについては、日本と韓国の就職競争の激しさの違いや起業のハードルの高さの違いが影響しているのではないかと、また、この就職観が日本と韓国の起業志望度に影響を与えているのではないかと考えるため、これらについて検証する。

アンケート調査

調査概要

調査期間は2023年12月12日から2024年1月12日の1ヶ月間で実施した。調査対象は日本の沖縄に住む大学生と韓国の大邱に住む大学生を対象とし、google formsを用いて調査を行った。1ヶ月間で日本の沖縄に住む大学生60人、韓国の大邱に住む大学生60人から回答を得ることができた。

調査の内容

就職競争の厳しさを問う設問、起業のハードルについて問う設問、就職観について問う設問、起業の志望度について問う設問からなるアンケートに回答してもらうという形で進めた。本調査は、「マイナビ 職業意識調査」から一部質問項目を引用して行った。

調査結果

設問1 あなたの性別を教えてください。

回答者は日本人が女性 38 人、男性 22 人となっていて、韓国人が女性 34 人、男性 26 人となっている。

表3 回答者の国籍と性別

国籍・性別	女性	男性	合計
日本	38	22	60
韓国	34	26	60
合計	72	48	120

設問2 理系ですか?文型ですか?

日本人の回答者は、文型が 51 人、理系が 9 人となっていて、韓国人の回答者は、文系が 41 人、理系が 19 人となっている。

就職競争の厳しさについて

設問3

日本の就職状況は厳しいと思いますか?

とてもあてはまると答えた人が 11 名 (18.3%)、ややあてはまると答えた人が 22 名 (36.7%)、どちらともいえないと答えた人が 13 名 (21.7%)、あまりあてはまらないと答えた人が 13 名 (21.7%)、全くあてはまらないと答えた人が 1 名 (1.7%) となっている。

한국의 취업 상황은 어렵다고 생각합니까?

아주 그렇게 생각한다고答えた人が 39 名 (65.8%)、약간 그렇게 생각한다고答えた人が 17 名 (28.3%)、보통이다と答えた人が 3 名 (5%)、거의 그렇게 생각하지 않다고答えた人が 1 名 (1.7%)、전혀 그렇게 생각하지 않다고答えた人は 1 名もいなかった。

起業のハードルについて

設問 4

起業に関する十分な知識がありますか？

とてもあてはまると答えた人が 2 名 (3.3%)、ややあてはまると答えた人が 3 名 (5%)、どちらともいえないと答えた人が 5 名 (8.3%)、あまりあてはまらないと答えた人が 12 名 (20%)、全くあてはまらないと答えた人が 38 名 (63.3%) となっている。

창업에 관한 충분한 지식이 있습니까?

약간 그렇게 생각한다고答えた人が 8 名 (13.3%)、보통이다と答えた人が 18 名 (30%)、거의 그렇게 생각하지 않다고答えた人が 25 名 (41.7%)、전혀 그렇게 생각하지 않다고答えた人が 9 名 (15%)、아주 그렇게 생각한다고答えた人は 1 名もいなかった。

設問 5

起業するための十分な資金がありますか？

とてもあてはまると答えた人が 1 名 (1.7%)、ややあてはまると答えた人が 1 名 (1.7%)、どちらともいえないと答えた人が 2 名 (3.3%)、あまりあてはまらないと答えた人が 6 名 (10%)、全くあてはまらないと答えた人が 50 名 (83.3%) となっている。

창업하기 위한 충분한 자금이 있습니까?

약간 그렇게 생각한다고答えた人が 2 名 (3.3%)、보통이다と答えた人が 8 名 (13.3%)、거의 그렇게 생각하지 않다고答えた人が 22 名 (36.7%)、전혀 그렇게 생각하지 않다고答えた人が 28 名 (46.7%)、아주 그렇게 생각한다고答えた人は 1 名もいなかった。

設問 6

起業することに対して不安を感じますか？

とてもあてはまると答えた人が 35 名 (58.3%)、ややあてはまると答えた人が 17 名 (28.3%)、どちらともいえないと答えた人が 4 名 (6.7%)、あまりあてはまらないと答えた人が 3 名 (5%)、全くあてはまらないと答えた人が 1 名 (1.7%) となっている。

창업하는 것에 대해 불안을 느낍니까?

아주 그렇게 생각한다고答えた人が 23 名 (38.3%)、약간 그렇게 생각한다고答えた人が 19 名 (31.7%)、보통이다と答えた人が 14 名 (23.3%)、거의 그렇게 생각하지 않다고答えた人が 3 名 (5%)、전혀 그렇게 생각하지 않다고答えた人が 1 名 (1.7%) となっている。

就職観について

設問 7

あなたの就職観に最も近いものはどれですか？

個人の生活と仕事を両立させたいと答えた人が 23 名 (38.3%)、楽しく働きたいと答えた人が 13 名 (21.7%)、自分の夢のために働きたいと答えた人が 9 名 (15%)、収入さえあればよいと答えた人が 6 名 (10%)、人のためになる仕事をしたいと答えた人が 4 名 (6.7%)、社会に貢献したいと答えた人が 3 名 (5%)、プライドのもてる仕事をしたいと答えた人が 2 名 (3.3%)、出世したいと答えた人は 1 名もいなかった。

당신의 취업의식에 가장 가까운 것은 어떤 것입니까?

개인의 생활과 일을 양립시키고 싶다고答えた人が 17 名 (28.3%)、즐겁게 일하고 싶다고答えた人が 16 名 (26.7%)、자신의 꿈을 위해 일하고 싶다고答えた人が 9 名 (15%)、수입만 있으면 된다고答えた人が 7 名 (11.7%)、프라이드를 가질 수 있는 일을 하고 싶다고答えた人が 5 名 (8.3%)、출세하고 싶다고答えた人が 5 名 (8.3%)、사회에 공헌하고 싶다고答えた人が 1 名 (1.7%)、남에게 도움이 되는 일을 하고 싶다고答えた人は 1 名もいなかった。

起業志望度について

設問 8

あなたは起業したいと思いますか？

とてもあてはまると答えた人が 6 名 (10%)、ややあてはまると答えた人が 10 名 (16.7%)、どちらともいえないと答えた人が 6 名 (10%)、あまりあてはまらないと答えた人が 16 名 (26.7%)、全くあてはまらないと答えた人が 22 名 (36.7%) となっている。

당신은 창업하고 싶습니까?

아주 그렇게 생각한다고答えた人が 8 名 (13.3%)、약간 그렇게 생각한다고答えた人が 21 名 (35%)、보통이다と答えた人が 12 名 (20%)、거의 그렇게 생각하지 않다고答えた人が 9 名 (15%)、전혀 그렇게 생각하지 않다고答えた人が 10 名 (16.7%) となっている。

本調査では、日本と韓国の大学生に対して、就職競争の厳しさ、起業のハードル、就職観、起業志望度を問う質問を行い、これらの質問に対するデータに有意性があるかどうかの検定を行った。

表4 日韓の就職競争の厳しさ、起業のハードル、就職観、起業志望度の検定の結果

	有意確率 (片側)	平均値の差
就職厳しさ	0.000	-1.083
起業知識	0.000	-0.767
起業資金	0.001	-0.450
起業不安	0.020	0.367
就職観	0.068	0.550
起業意欲	0.001	-0.767

就職の厳しさを問う設問では、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -1.083 , $p < 0.00$)。そして検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも、自国の就職状況について厳しいと思っていることがわかる。

起業知識を問う設問では、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.767 , $p < 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも、起業に関する十分な知識があると思っていることがわかる。

起業資金を問う設問では、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.450 , $p < 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも、起業するための十分な資金があると思っていることがわかる。

起業不安を問う設問では、日本の大学生の方が韓国の大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 0.367 , $p > 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、日本の大学生の方が韓国の大学生よりも、起業することに対して不安を感じていることがわかる。

起業意欲を問う設問では、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.767 , $p < 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも、起業志望度が高いということがわかる。

就職観を問う設問では、検定の結果より有意確率が 0.05 を上回っているため、有意性が認められない。このことから、日韓の大学生がもっている就職観については差がないことがわかる。

表 5 日韓男子の就職競争の厳しさ、起業のハードル、就職観、起業志望度の検定の結果

	有意確率 (片側)	平均値の差
就職厳しさ	0.000	-1.038
起業知識	0.004	-0.811
起業資金	0.046	-0.430
起業不安	0.252	0.196
就職観	0.207	0.497
起業意欲	0.070	-0.657

就職の厳しさを問う設問では、韓国の男子大学生の方が日本の男子大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -1.038 , $p < 0.00$)。そして検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国の男子大学生の方が日本の男子大学生よりも、自国の就職状況について厳しいと思っていることがわかる。

起業知識を問う設問では、韓国の男子大学生の方が日本の男子大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.811 , $p < 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国の男子大学生の方が日本の男子大学生よりも、起業に関する十分な知識があると思っていることがわかる。

起業資金を問う設問では、韓国の男子大学生の方が日本の男子大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.430 , $p < 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国の男子大学生の方が日本の男子大学生よりも、起業するための十分な資金があると思っていることがわかる。

起業不安を問う設問では、日本の男子大学生の方が韓国の男子大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 0.367 , $p > 0.00$) が、検定の結果より有意確率が 0.05 を上回っているため、有意性が認められない。このことから、日韓の男子大学生の起業することに対する不安感については差がないことがわかる。

就職観を問う設問では、検定の結果より有意確率が 0.05 を上回っているため、有意性が認められない。このことから、日韓の男子大学生がもっている就職観については差がないことがわかる。

起業意欲を問う設問では、韓国の男子大学生の方が日本の男子大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.657 , $p < 0.00$) が、検定の結果より有意確率が 0.05 を上回っているため、有意性が認められない。このことから、日韓の男子大学生の起業志望度については差がないことがわかる。

表6 日韓女子の就職競争の厳しさ、起業のハードル、就職観、起業志望度の検定の結果

	有意確率 (片側)	平均値の差
就職厳しさ	0.000	-1.115
起業知識	0.001	-0.718
起業資金	0.008	-0.433
起業不安	0.018	0.480
就職観	0.123	0.546
起業意欲	0.004	-0.783

就職の厳しさを問う設問では、韓国的女子大学生の方が日本の女子大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -1.115 、 $p < 0.00$)。そして検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国的女子大学生の方が日本の女子大学生よりも、自国の就職状況について厳しいと思っていることがわかる。

起業知識を問う設問では、韓国的女子大学生の方が日本の女子大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.718 、 $p < 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国的女子大学生の方が日本の女子大学生よりも、起業に関する十分な知識があると思っていることがわかる。

起業資金を問う設問では、韓国的女子大学生の方が日本の女子大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.433 、 $p < 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国的女子大学生の方が日本の女子大学生よりも、起業するための十分な資金があると思っていることがわかる。

起業不安を問う設問では、日本の女子大学生の方が韓国的女子大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 0.480 、 $p > 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、日本の女子大学生の方が韓国的女子大学生よりも、起業することに対して不安を感じていることがわかる。

就職観を問う設問では、検定の結果より有意確率が 0.05 を上回っているため、有意性が認められない。このことから、日韓の女子大学生がもっている就職観については差がないことがわかる。

起業意欲を問う設問では、韓国的女子大学生の方が日本の女子大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.783 、 $p < 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国的女子大学生の方が日本の女子大学生よりも、起業志望度が高いということがわかる。

表7 日韓理系の就職競争の厳しさ、起業のハードル、就職観、起業志望度の検定の結果

	有意確率 (片側)	平均値の差
就職厳しさ	0.010	-1.357
起業知識	0.021	-0.901
起業資金	0.198	-0.345
起業不安	0.108	0.544
就職観	0.303	0.520
起業意欲	0.112	-0.684

就職の厳しさを問う設問では、韓国の理系大学生の方が日本の理系大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -1.357 、 $p < 0.00$)。そして検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国の理系大学生の方が日本の理系大学生よりも、自国の就職状況について厳しいと思っていることがわかる。

起業知識を問う設問では、韓国の理系大学生の方が日本の理系大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.901 、 $p < 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国の理系大学生の方が日本の理系大学生よりも、起業に関する十分な知識があると思っていることがわかる。

起業資金を問う設問では、韓国の理系大学生の方が日本の理系大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.345 、 $p < 0.00$) が、検定の結果より有意確率が 0.05 を上回っているため、有意性が認められない。このことから、日韓の理系大学生がもっている起業するための十分な資金については差がないことが分かる。

起業不安を問う設問では、日本の理系大学生の方が韓国の理系大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 0.544 、 $p > 0.00$) が、検定の結果より有意確率が 0.05 を上回っているため、有意性が認められない。このことから、日韓の理系大学生の起業することに対する不安感については差がないことがわかる。

就職観を問う設問では、検定の結果より有意確率が 0.05 を上回っているため、有意性が認められない。このことから、日韓の理系大学生がもっている就職観については差がないことがわかる。

起業意欲を問う設問では、韓国の理系大学生の方が日本の理系大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.684 、 $p < 0.00$) が、検定の結果より有意確率が 0.05 を上回っているため、有意性が認められない。このことから、日韓の理系大学生の起業志望度については差がないことがわかる。

表 8 日韓文系の就職競争の厳しさ、起業のハードル、就職観、起業志望度の検定の結果

	有意確率 (片側)	平均値の差
就職厳しさ	0.000	-1.032
起業知識	0.001	-0.636
起業資金	0.003	-0.452
起業不安	0.083	0.275
就職観	0.154	0.398
起業意欲	0.013	-0.623

就職の厳しさを問う設問では、韓国の文系大学生の方が日本の文系大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -1.032 , $p < 0.00$)。そして検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国の文系大学生の方が日本の文系大学生よりも、自国の就職状況について厳しいと思っていることがわかる。

起業知識を問う設問では、韓国の文系大学生の方が日本の文系大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.636 , $p < 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国の文系大学生の方が日本の文系大学生よりも、起業に関する十分な知識があると思っていることがわかる。

起業資金を問う設問では、韓国の文系大学生の方が日本の文系大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.452 , $p < 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国の文系大学生の方が日本の文系大学生よりも、起業するための十分な資金があると思っていることがわかる。

起業不安を問う設問では、日本の文系大学生の方が韓国の文系大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 0.275 , $p > 0.00$) が、検定の結果より有意確率が 0.05 を上回っているため、有意性が認められない。このことから、日韓の文系大学生の起業することに対する不安感については差がないことがわかる。

就職観を問う設問では、検定の結果より有意確率が 0.05 を上回っているため、有意性が認められない。このことから、日韓の文系大学生がもっている就職観については差がないことがわかる。

起業意欲を問う設問では、韓国の文系大学生の方が日本の文系大学生よりも平均値が高いことがわかった (平均値の差 -0.623 , $p < 0.00$)。そして、検定した結果は、有意確率が 0.05 を下回っているため、韓国の文系大学生の方が日本の文系大学生よりも、起業志望度が高いということがわかる。

考察

調査の結果より、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも、自国の就職状況について厳しいと思っている傾向がある。起業のハードルについては、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも、知識、資金面に関して十分あると思っていることがわかり、起業に対する不安感に関しては日本の大学生の方が韓国の大学生よりも高い傾向にあることがわかった。このことから、起業のハードルについては韓国の方が日本よりも低い傾向にあるのではないかと考えることができる。就職観については、日韓の大学生の間で違いが見られず、起業志望度については、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも高い傾向にあることがわかった。

以上の検証結果から、日本と韓国は就職競争の激しさ、起業のハードルの高さに違いがあるものの、これらが就職観に影響を与えているわけではないことがわかった。また、起業志望度にも違いがあるものの、就職観が起業志望度に影響を与えているわけではない。そのため、起業志望度の違いには就職観ではなく、就職競争の激しさや起業のハードルの高さ、またその他の要因が影響を及ぼしているのではないかと考える。

結論

以上のことより、先行研究では、日本の学生の職業観は「楽しく働ける」を重視しており、韓国の学生の職業観は「給与」を重視しているとあったが、今回調査の対象となった沖縄の大学生、大邱の大学生の実態調査の結果、日韓の大学生の就職観については違いがなかった。しかし、自国の就職の厳しさ、起業のハードル、起業志望度については日本と韓国で差が出ており、就職観ではなく、自国の就職競争の激しさや企業のハードル、今回は調査していないその他の要因が、就職志望度の違いに影響を及ぼしているのではないかと考えた。また、今回の調査では実態調査を行った地域を限定しているため、必ずしも日韓の大学生が全員こうであると言えるわけではなく、日韓の大学生の就職観の違いについて詳しく研究するには、更なる大規模な調査が必要である。

注

- ¹ 식품산업통계정보 (2021) 「커피전문점 사업 체수」
食品産業統計情報 (2021) 「コーヒー専門店 事業体数」
<https://www.atfis.or.kr/home/food/statsnew/in.do> より抜粋。(2023年10月22日閲覧)。
- ² 全日本コーヒー協会 (2021) 「喫茶店事業所数」 <https://coffee.ajca.or.jp/data/statistics/>
より抜粋。(2023年10月22日閲覧)。
- ³ world bank (2021) 「世界の自営業の総雇用に占める割合」
<https://graphtochart.com/social-protection-&-labor/world-self-employed-total-of-total-employment-modeled-ilo-estimate.php> より抜粋。(2023年9月20日閲覧)。

-
- 4 中島剛 (2019)、「就業プロセス・キャリア意識の違いから何を学ぶかー日本・韓国の若手正社員を対象にした自由記述分析ー」、『経済教育』38号、p.152。
 - 5 文部科学省 (2022)、「令和4年3月大学等卒業者の就職状況」、[20220517-mxt_gakushi01-000022676_1.pdf \(mext.go.jp\)](https://www.mext.go.jp/mxt_gakushi01-000022676_1.pdf) より抜粋。(2023年12月9日閲覧)。
 - 6 대한민국 교육부 (2022)、「2022년 고등교육기관 졸업자 취업통계조사」、邦訳 大韓民国 教育部 (2022)、「2022年 高等教育機関 卒業者 就業統計調査」、[2022년도 고등교육기관 졸업자 취업통계 조사 지침 \(moe.go.kr\)](https://www.moe.go.kr) より抜粋。(2023年12月9日閲覧)。
 - 7 グローバルノート (2022)、「国際統計サイトによる世界の大学進学率国別ランキング (短期大学含む)」、世界の大学進学率 国別ランキング・推移 - GLOBAL NOTE、<https://www.globalnote.jp/post-1465.html> より抜粋。(2024年1月15日閲覧)。
 - 8 대한민국 교육부 (2022)、「2022년 고등교육기관 졸업자 취업통계조사」、邦訳 大韓民国 教育部 (2022)、「2022年 高等教育機関 卒業者 就業統計調査」、[2022년도 고등교육기관 졸업자 취업통계 조사 지침 \(moe.go.kr\)](https://www.moe.go.kr) より抜粋。(2024年1月16日閲覧)。
 - 9 株式会社マイナビ (2024)、「マイナビ 職業意識調査」、https://career-research.mynavi.jp/research/20230425_49065/ より抜粋。(2023年11月22日閲覧)。
 - 10 大脇錠一・脇田弘久・小見山隆行・伊藤万知子・新井 亨・大久保八重 (2008)、「大学生の就職意識に関する調査研究」、『愛知学院大学 流通科学研究所所報号』15号、pp. 44-48。
 - 11 植田和真・小平和一郎 (2020)、「現代学生の勤労意識と新日本的経営の未来像ー新入社員は、就社するのか、就職するのかー」、『開発工学』40巻1号、pp. 99-100
 - 12 한국대학신문 (2023)、「대학생의식조사」、邦訳 韓国大学新聞 (2023)、「大学生意識調査」、<https://news.unn.net> より抜粋。(2023年12月9日閲覧)。
 - 13 芝居清久・吉野諒 (2013)、「職業観・労働観に現れる価値観の多様性と普遍性ー環太平洋価値観国際比較調査 データの文化多様体解析 CULMANー」、『データ分析の理論と応用』3巻1号、pp. 30-31

参考文献

- ・植田和真・小平和一郎 (2020)、「現代学生の勤労意識と新日本的経営の未来像ー新入社員は、就社するのか、就職するのかー」、『開発工学』40巻1号、pp. 97-100。
- ・大脇錠一・脇田弘久・小見山隆行・伊藤万知子・新井 亨・大久保八重 (2008)、「大学生の就職意識に関する調査研究」、『愛知学院大学 流通科学研究所所報号』15号、pp. 41-68。

- ・株式会社マイナビ (2024)、「マイナビ 職業意識調査」、https://career-research.mynavi.jp/research/20230425_49065/ (2023 年 11 月 22 日閲覧)。
- ・文部科学省 (2022)、「令和 4 年 3 月大学等卒業者の就職状況」、[20220517-mxt_gakushi01-000022676_1.pdf \(mext.go.jp\)](https://www.mext.go.jp/mxt_gakushi01-000022676_1.pdf) (2023 年 12 月 9 日閲覧)。
- ・グローバルノート (2022)、「国際統計サイトによる世界の大学進学率国別ランキング (短期大学含む)」、世界の大学進学率 国別ランキング・推移 - GLOBAL NOTE <https://www.globalnote.jp/post-1465.html> (2024 年 1 月 15 日閲覧)。
- ・芝居清久・吉野諒 (2013)、「職業観・労働観に現れる価値観の多様性と普遍性－環太平洋価値観国際比較調査 データの文化多様体解析 CULMAN－」、『データ分析の理論と応用』3 巻 1 号、pp. 17-47。
- ・全日本コーヒー協会 (2021)、「喫茶店事業所数」、<https://coffee.ajca.or.jp/data/statistics/> (2023 年 10 月 22 日閲覧)。
- ・中嶋剛 (2019)、「就業プロセス・キャリア意識の違いから何を学ぶかー日本・韓国の若手正社員を対象にした 自由記述分析ー」、『経済教育』38 号、pp. 152-159。
- ・world bank (2021)、「世界の自営業の総雇用に占める割合」、<https://graphtochart.com/social-protection-&-labor/world-self-employed-total-of-total-employment-modeled-ilo-estimate.php> (2023 年 9 月 20 日閲覧)。
- ・식품산업통계정보 (2021)、「커피전문점 사업 체수」、<https://www.atfis.or.kr/home/food/statsnew/in.do> (2023 年 10 月 22 日閲覧)。
- ・대한민국 교육부 (2022)、「2022 년 고등교육기관 졸업자 취업통계조사」、[2022 년도 고등교육기관 졸업자 취업통계 조사 지침 \(moe.go.kr\)](https://www.moe.go.kr/2022-yeon-go-deung-gyo-yuk-gi-gwan-yeol-yeop-ja-chui-yeop-tong-gye-jo-sa-ji-chim) (2023 年 12 月 9 日閲覧)。
- ・한국대학신문 (2023)、「대학생의식조사」、<https://news.unn.net> (2023 年 12 月 9 日閲覧)。